

認知哲学から見る批判的思考と合理性

太田紘史

(東京大学総合文化研究科)

批判的思考を推進する教育プログラムは、一般的な思考の能力や態度を涵養することを目指している。このような教育プログラムを推進していくうえでは、まず、批判的思考の基盤となるような心理機能を明らかにするという、経験的な問題に取り組む必要があるだろう。我々の思考は、どのような要素から構成されており、それらはどのような原理にしたがっており、またどのような弱点を抱えているのだろうか。これらを解明することは、批判的思考の教育プログラムを実装するにあたって不可欠なものになるだろう。

また同時に、批判的思考として望まれる思考のあり方はどのようなものかという、規範的な問題にも取り組む必要がある。どの文献から批判的思考の定義を探してみても、そこではほぼ常に合理的な思考について言及されており、合理性が批判的思考の核心的な規範として位置づけられていると言ってよいだろう。しかし、思考が合理的であるのはいつなのかは、簡単に答えられる問題ではない。実際、基本的な論理学や確率論への従属、状況的な制約下での問題解決、目標そのものの最適化など、合理性はかなり多層的なものであるように思われる。

これら経験的問題と規範的問題はいずれも重要なものであるが、どちらも認知科学や認知哲学において——特に後者は「合理性論争」のなかで——長らく話題になってきた問題でもある。そこでは、推論と意思決定に見られるヒューリスティクスとバイアスの発見を端緒として、様々な人間の思考パターンに(不)合理性を帰属することの妥当性が論じられてきた。それゆえ、この議論の延長線上に批判的思考をめぐる問題を明示的に位置づけることは、批判的思考についての理解を深め、またその教育プログラムを探求していくうえで、有益であろう。

今回の報告では、批判的思考をめぐる経験的問題と規範的問題を、合理性論争の文脈に位置づけたうえで、合理性をいわゆる知能から区別する「三部分構造モデル」に着目する。このモデルに基づいた最近の経験的研究（とりわけ「マイサイド・バイアス」を題材としたもの）を批判的に検討しながら、そこで想定（あるいは排除）されている合理性概念や、さらには合理性を超える思考規範の可能性について考察してみたい。